

ドナウ の 四季

2013年・新春号・No.17

| | | |
|---------------------------|--------------------|----|
| ハンガリーバレエ界に輝く若き二人の日本人バレリーナ | 桑名 一恵 | 1 |
| 留学生自己紹介 | 伊藤 さやか・長内 裕美・柳沼 加奈 | 3 |
| ヘレンドでハイキング&ハンティング | 森田 友子 | 6 |
| 神のご加護を運んでくる乙女たち | キシユ・ゲルゲイ | 7 |
| 新撰組巡り | オラー・ニコレッタ | 9 |
| 腫瘍治療における温熱療法の意義 | 盛田 常夫 | 10 |
| 闘わない闘病記 (1) | 佐藤 経明 | 12 |
| 第20回熱気球世界選手権 アメリカ | 加藤 詩乃 | 13 |
| 緑の丘日本語補習校 | ジョーリ 幸子 | 14 |
| ブダペスト日本人学校 | 菊地 智裕 | 15 |
| スポーツ行事・運動サークル情報 | | 16 |

桑名 一恵

ハンガリーバレエ界に輝く若き二人の日本人バレリーナ

ハンガリー国立バレエ団のプレミア公演があった「オネーギン」。ロシアの小説家プーシキンによる韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』に基づく作品だが、オペラ「エフゲニー・オネーギン」の曲を使用せず、チャイコフスキーの楽曲を流用しているのが特徴である。物語バレエと呼ばれるジャンルの中で良く知られており、かなり早い時期からハンガリー国立バレエ団は、この公演を大々的に宣伝していた。他のバレエ作品と違う、登場人物・出演者が多くない。この作品に二人の若き日本人バレリーナがオープニングから重要な役で出演していた。どうにも止められない期待感と優越感。そして誇らしくも思えた。ついつい彼女たちをひいき目で観ていた事も事実だが、なによりも指先まで行き届いた表現力には感心させられた。

この二人にインタビュー依頼をした。その目的は二つ。一つは二人が素晴らしいステージに立っているこれまでのキャリアに、とても関心があったから。そしてもう一つは、この二人をもっと多くの方に知ってもらわなければならないかと思つたから。世界に挑戦する若い世代のしっかきりとした思いを、感じ取ってもらえたらと思う。

インタビュー場所は、国立オペラ座の近くにある「ムーヴェースカフェ」。芸術を語るには、申し分のない場所だ。練習帰りに立ち寄りもらった。プレミア公演に招待して頂いたので、私が先に御礼を言うべきなのだが、「来て頂いて、ありがとうございます」と先に御礼を言われてしまった。

桑名 この公演は今までに立バレエ団の熱の入った公演になっているなど感じたのですが。

浅井・藤井 今回の「オネーギン」は、今年初めてのプレミアで、ディレクター自身、かなり力を入れていた作品です。他の公演などは2週間～1ヶ月程度の日程で進んで行くのですが、今回の練習は2ヶ月位前から始まりまして、もちろん公演中も練習はありますので回を重ねるごとに、仕上がりが良くなっています。

浅井 もう一つは、ディレクターが変わったことが大きいですね。私は国立バレエ団に入団して4年が経つのですが、以前のカンパニーはアットホームな感じだったので、技術的なこと含めてゆる

い感じで、年上の方にとってはよかったです。バレエと言うのは「切磋琢磨」して創り上げてゆくものだと思うので、それでは向上していかないのではないかと感じていました。現在のディレクターになって、「緩急」を一通していこうという方針が変わり、バレエ団の意欲が大切な事が全面的に現れていると思います。以前よ



オネーギンの浅井&藤井

なかつたようなハンガリー国一人一人の意識も違いますが、全体で良いものを作るという共通な部分も空気が違うのがわかります。

桑名 もう少しその変化を教えてくださいませんか。

浅井 カンパニーの雰囲気アバウトと言うか、なあなあだったものが、一生懸命な姿勢に変わってきたし、一人でもがんばっている人がいると、その相乗効果といいますか、それにつられて前向きな考えに切り替えていったりしています。ディレクター自身も普通のレッスンを観に来るので、きちんとやらなければという気持ちも出てきますよね。常に緊張感があると疲れてしまうので、もちろんプラスとマイナスの両面はありますが、私にとっては良い緊張

感が保てるのでそちらを選択しますし、自分には必要なことだと思っています。芸術と言うものは、そのような意識が無いと、どんどん下がってしまうと感じています。

桑名 浅井さんはサンクトペテルブルグから、藤井さんはワシントンD.Cからハンガリー国立バレエ団にいらしたわけですが、ロシア

温熱治療のパラダイムを転換する

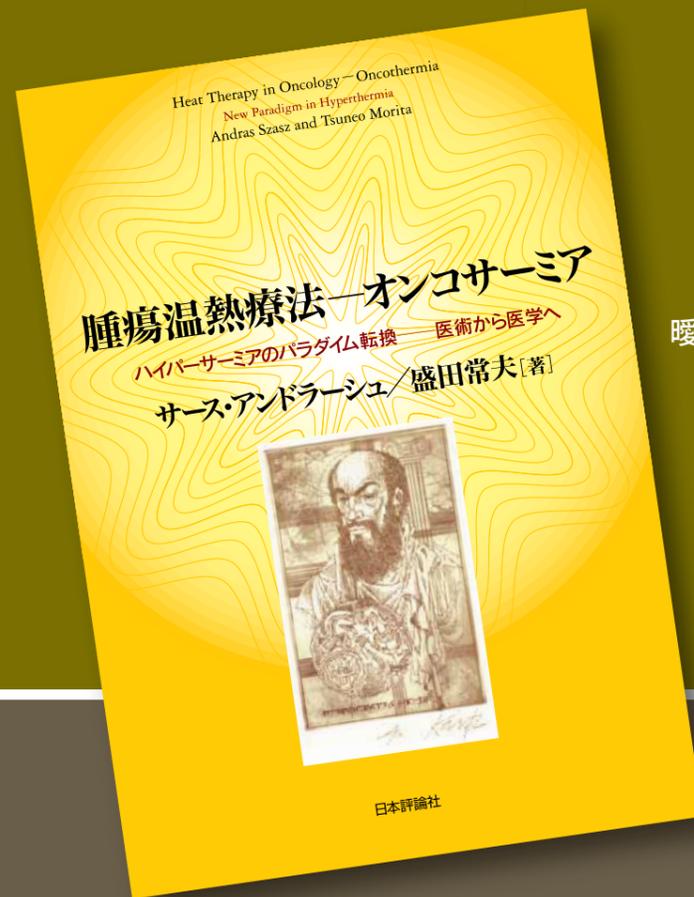
温熱治療を根本から見直し、あるべき手法を示した著書。曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。ドイツでは百か所以上のクリニックで、韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
 - 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
 - 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
 - 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却：リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)

- 第4章 腫瘍温熱療法
 - 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
 - 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
 - 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用



留学生自己紹介

は私にとってとても貴重な勉強になっています。日本にも都市によってはオーケストラがありますが、このオーケストラは非常に街に密着している印象を受けました。

ジュールには日本人に対して理解のある方が多く、日本に興味を持ち日本語を勉強している方も沢山いらっしゃいます。またジュールはブダペストとウィーンの間あたりに位置しているのどちらへも1時間半ほどで行くことが出来ます。気軽にブダペストへオペラを見に行ったり、ウィーン・ウィーンフィルの演奏を聴きに行くことも出来ます。まだ数回ほどしか訪れていませんがこれから何度も行くと思っています。

初めはハンガリーがどのような国かまいまいピンと来ておらず、不安でいっぱいでしたが、生活をしていくうちにハンガリーが好きになり、ハンガリーへ来て本当に良かったなと感じています。日本では地元とは遠く離れた東京で音楽を勉強するためにアルバイトと練習を両立しなければならず毎日時間に追われていましたが、今は音楽にだけ自分の時間を注げるのでとても幸せです。

まだハンガリーでの留学は始まったばかり



です。留学が遊学にならぬようこれからも毎日を大切に、存分にハンガリーの土地を感じ理想の音楽家を目指し成長していきたいと思っています。まだ帰国の予定は定まっていますが、日本に帰ったら多くのハンガリー出身の作曲家作品を取り上げて演奏活動を行いたいと思っています。また日本とハンガリーの文化交流活動にも参加出来たら、と思います。

ヨーロッパで過ごす初めてのクリスマスが近づいています。少しずつクリスマスモ

ドになっていく街に胸を膨らませつつ、後悔をしないよう一生懸命練習に励んでくつもりです。

(いとう・さやか)

次のステップへ

Ferenc Fehér Dance Company

長内 裕美

「何でハンガリーに行くの??？」と留学前に、多くの友人から質問されました。その答えは「フェレンツ・フェヘールという振付家・ダンサーさんのもとでダンスを学びたかったから。国で選んだのではなくて、人で選んだら、たまたまハンガリーだったの」。

私が踊っている「コンテンポラリーダンス」というダンスは、主にフランス、ベルギー、スイス、オランダ、ドイツ等の国々で盛んです。到着してから知ったのですが、この分野でハンガリーに留学している日本人はなんと一人もいませんでした。ハンガリーでは、音楽やオペラ、バレエに比べて、コンテンポラリーダンスは盛んではありませんが、優れたダンスカンパニー(規模は他国に比べると小さいですが)、優れた振付家やダンサーさんがたくさんいることは事実です。

2年ほど前にフランスのアンジェにあるコンセルヴァトワールに短期留学していた際は、地方都市だというのに、劇場が3つ、ダンススタジオが9つも整えられていました。パリでは、数えきれないくらいの劇場とスタジオがあり、公演が毎日開催されています。しかし、ここブダペストは、コンテンポラリーダンス専用の劇場は2つしかなく(演劇やライブとの共用劇場は多数あります)、その規模も小劇場ほどです。また、政府からの助成金の大幅カットの為に、無くなる劇場や、活動ができなくなるカンパニーもあるようです。

ブダペストに滞在してまだ2ヶ月ほどですが、フェレンツとのリハーサルは私にとって夢のような時間です。今は、TRAFÓという劇場に付帯しているスタジオでリハーサルを行っています。リハーサルと同時に彼のメソッド、技術等も学んでいます。まだ先には

なりますが、彼とのデュエット(新作)を来年2013年4月にブダペストにあるAtriumという劇場で初演することが決まりました。

リハーサル以外には、10月に郊外の小さい村へダンスパフォーマンスをしに行きました。11月には16日間のインドのオフィシャルツアーにも同行しました。ニューデリー、デラデューン、最後はラジャスターンという砂漠でのパフォーマンス。たくさんの人々との出会いがあり、私は即興パフォーマンスに参加させていただきました。リハーサルだけでは得られない、信頼関係を築くいい機会となり、一生忘れられない思い出となりました。というのも、一見クールに見えるフェレンツは、とても動物好きで、まるで子どものような人柄だったという一面もあったのです。

フェレンツとの出会いは2010年春、韓国でのダンスフェスティバルで、私が彼の作品を観たのが初めてでした。私は韓国のダンスカンパニーで作品を踊っていました。初めて彼の作品を観た時、電気ショックを受けたような衝撃が身体を走りました。アクロバティック、かつ俊敏な動きをする一方で、身体的全先端まで神経を行き渡らせ、小刻みに震えたかと思えば、一瞬にして静止し、関節部分のみを動かしています。これまでに見たことの無い作品で、コミカルでありながら、人間の身体表現力の奥深さ、作品に対する追求心の深さに大きな衝撃を受けました。

その後、同年の秋、スペインのカナリア諸島で開催されたコンペティションで再会し、初めて彼と話す機会がありました。フランスに帰国後も、ずっとフェレンツのことが気になっていて、文化庁の在外研修制度で受入れてもらえないか聞いたところ、彼からすぐに承諾を得ることが出来ました。文化庁から承認を得ることができるまでかなり待ちましたが、その分、今、たくさんを経験し、感じたことを吸収したいと思っています。もちろん、ブダペストという街も大好きですし、今、多くの方から助けていただいていることにもとても感謝しております。

留学生自己紹介

日本では、アーティストとしての活動の他に、都立総合芸術高校の特別非常勤講師として働き、「子どもの城」にて子どもを対象としたダンスワークショップを行う機会をいただいていた。今、日本人として自信を持って創作していくこと、区別、選択し



て行くことが大切だと痛感し、次のステップへ行くためにも揺るぎない何かを得たいと強く思っています。1年という短い期間ですが、フェレンツが確立した振付・創作方法、根本的思想をより深く探求、考察する事によってその技術や思想を吸収し、今一度ダンス・表現・肉体とは何かを考え、今後、振付家・ダンサー、指導者としての活動に役立てていきたいと思います。

(ながうち・ひろみ)

2年目のできる学ぶということ

リスト音楽院トロンボーン科2年生

柳沼 加奈

現時点で自分がやりたいこと、できること。ブダペストに滞在して2年目を迎えた今、この二つのことを常に意識しながら学べることに、心から感謝の念と喜びが取りまきます。わたしが初めてブダペストに下見目的で2週間ほど滞在したのが2010年2月の寒い時期でした。海外に行くのも初めてなのに、一人で乗り換え経路までしなければいけない。どうなることかと懸念しましたが日本でサポートしてくださった会社の方に懇切丁寧に説明していただいて、スム

ーズに無事ブダペストに到着することができて安心したのが第一でした。

いざ生活してみると日本にいたときよりも頼まれること、やらなければいけないことが格段に少なく、一人で過ごす時間が多いということに気づきました。日本を離れて初めてとてもゆったりとした時間の流れを感じ、今まで想像さえもできなかった地で一から学ぶ。戸惑うことに慣れようとして、自分が気になったことをチェックするので精一杯でした。ところが、様々なことを知れば知るほど、自分が期待していた以上の情報が存在していて、迷う前にブダペストで学びたいと決めていました。

元々中学生のときからなんとなく留学はしてみたいと思っていましたが、吹奏楽部目当てに高校入学してちゃんとトロンボーンを習い始め、本格的な音楽の勉強をし始めると、海外ではどのような学業に対するアプローチが行われているんだろうという好奇心が強くなっていきました。高校2年の時に高校卒業してすぐに海外に行くか、日本で準備期間を設けてある程度成長してから行くかという選択に悩みました。準備には何が必要なのか、どこまで自分のできるのか、いろいろ調べて考えた結果、まだ自分は日本のトロンボーンを吹いている人たちについてなにも把握していないし、あまりに情報が少なすぎると気づき、日本で音楽短期大学に通い、その間自分ができる精一杯のスキルアップに取り組みました。

実際に短期大学に入学してみると、独特の雰囲気やルールなど音楽以外のことも身につけることができ、人間的にもいろんな意味で成長できたと思います。そして短大1年の後半にハンガリーへ下見に行き、リスト音楽院に入学することを決め、音楽留学の入試対策に取り組み始めました。すると、短期大学で学んでいることとヨーロッパで採用されている様々な教科の相違点がどんどん浮き彫りになってきて、とても大変でしたが準備期間が過ぎ、いよいよ入学試験となりました。入学試験もちょっとした手違いが多くて翻弄されていました。試験が無

事終わり、合格通知をもらって、ビザの手続きをして、ブダペストに到着しました。いざ学生生活が始まると、毎日めまぐるし過ぎて行きよく覚えていません。

英語で行われる授業が次々と過ぎて行き、週3回あるレッスンの準備や予想以上にたくさんある宿題で前期はあっという間で、ひとつ試験がすぎて、新たな学期が始まる時期に「ああ、自分は結構一生懸命だったんだな」とようやく実感できました。もともと人見知りで兄弟がいないため一人で黙々と何かをすることに慣れてしまっている私に接して下さる人たちに心から感謝の念が沸き起こりました。金管楽器のマイペースで親切な人々も観察して接すればするほど楽しくてとても刺激をもらっています。リスト音楽院のトロンボーン科はよく式典のファンファーレをすることが多いのですが、去年はオペラ座で行われたリスト音楽院の教授陣によるガラ・コンサート、今年9月半ばには国会議事堂でオリンピックとパラリンピックの選手が感謝状及び功労賞を贈呈される式典などで演奏することができました。

マスタークラスを見学・参加したり、コンサートで金管アンサンブルをやったり、オーケストラに参加させていただきました。日本でのコンサートにも誘っていただき、もう二度とできないだろう経験をすることができて、自分のトロンボーンに対するアプローチも広がり、非常に充実しています。夏休みには国際トロンボーンフェスティバルというトロンボーンを演奏している人なら誰も聞いたことがあるトロンボーン奏者にとっての大きなお祭りをパリに聴きに行きました。リスト音楽院を卒業された先輩方の演奏も楽しく聴けて、新たな発見があり、自分にプラスとなるものが蓄積できてよかったと思いました。去年一年間過ごして余裕ができたからこそ見える取り組めること、行き詰まった時には自分をリセットして、新たなスタートをきることでさらなるスキルアップをしていきたいと考えています。

(やなぎぬま・かな)

妃の街ヴェスプレーム便り その5

ヘレンドでハイキング&ハンティング

森田 友子

ヘレンドと聞けば、大半は、世界的に有名なヘレンド陶磁器を連想するだろう。でも、我家では、ハイキングかハンティング。ヘレンド社がこの地を選んだ理由が、窯に必要な薪の量と質ただただあって、ヘレンド村の奥には豊かな森が広がっている。ヴェスプレームからヘレンド村までは、車で約10分。村を抜けると、すぐに美しいパコニ森の山道に入る。パコニは、ピクニック気分ですいつでも気が向いた時に訪れられる森。急斜面、断崖絶壁もあるものの、日本の山歩きのような重装備は不要。

我家の普通のヘレンドコースは、野道の脇にあるベリーを頬張り、イバラやイラグサに気をつけながらのハイキング。ゆるやかな丘を越え、ブナの林に入り、鳥や虫を見ながら森林浴。主人は、こどもたちに、「森は自然の教会、静かに歩くこと」と教えて

いるから、鹿や猪、キツネや野ウサギと遭遇することも少なくない。冬、集団で移動する鹿は大迫力だし、春、ウリ坊たちがお母さんイノシシの後をついていく姿は可愛らしい。秋の鹿の繁殖期の唸り声も神秘的。双眼鏡は必需品だが、きこ狩り、山菜の季節はカゴを、雪の季節はソリを持参する。主人は、銃を片手にでかけることもある。これが、ヘレンド



特別コースのハンティング。ヘレンドは、主人の所属するハンティング協会の狩猟領域でもあるから。

狩猟は、昔は、貴族・王族の特権階級や富裕層にしか許されない行為だったが、今は、一般市民にも門戸が開かれている。ただ、協会に入会するには、一応の審査・試験がある。入会希望者にも、かなりの覚悟が必要。ちょっとした趣味にしては高額だし、多くのボランティア活動が課され、まさに金と暇の両方を必要とされるから。狩猟学という学問があり、森林・林業技術者と

も区別された個別的な専門家も存在するが、免許は一般試験で取得できる。

しかし、古代から営まれていた狩猟は、現代社会では突然に特別行為となってしまい、これに対する意見は、神聖／残虐の両極端に分かれる。前者は、自然に親しみ、敬意、森林や野生動物についての深い知識を持っている人が感じ、後者は、動物愛護家、標的を撃つ行為を楽しむ人や密猟者と接触のあった人、もしくは、狩猟について無知な人が、なんとなく持つ感情だと思う。

狩猟自体は、狼などの肉食獣がいなくなった今、森の均衡をとる為に必要な業務で、森林や農作物被害防止にも猟師たちが働く。だから、ハンティング協会の仕事は、野生動物を管理・保護し、森林や農作物を野生動物から守ること。毎年、野生動物個体数調査が行われ、各領域の撃つ頭

数が国で決定される。この頭数は、協会にとって、撃つ義務であると同時に、協会を維持する為の撃てる権利でもある。撃つ頭数抑制する一方、水飲み場を作ったり、冬の間、餌や塩を与えたり、病気が蔓延した場合の対策も考えなければならない。森林や農作物に損害が生じた場合は、ハンティング協会が賠償することになるので、被害を最低限に抑える為、やれ柵だ、やれ見張り台だ、と日曜大工仕事ざらにあり、実りのシーズンは、作物を交代で見張る仕事もある。

さて、この様に膨大な義務と責任が課せられているハンティング協会だが、どのように運営されているのだろうか。帳簿の支出項目は、狩猟権利賃貸料、冷凍テナ・管理人費、見張り台、電流柵等の維持費、冬の餌代、そして、野生動物の起した被害の損害賠償金。しかし、この莫大な費用は、会費、野生物、ハンティングガイドの収入のみで賄われている。毎年全国平均15%以上の赤字経営だそうだ。

それでも、狩猟システムは維持されている。ヨーロッパでは、ハンティングが、ひとつの文化として存在しているからだろう。狩猟本来の目的は薄れ、自然と親しむ方法、自らの知識や判断力を試す、または、猟友や猟犬、馬との連携を楽しむスポーツのような行為として行われている。中でも、ハンガリー・オーストリア・ドイツの中央ヨーロッパでは、トロフィーの文化が大きな部分を占める。この地域は、東側の大きくて長い角の鹿と西側の小さい角の鹿が交わる場所で、ポイントの高いトロフィーが集まっている。

戦利品としての鹿の角は、重さ、大きさ、長さ、太さ、両角の幅、色、枝数によって評価されポイントが付けられる。獲得したトロフィーには、全てに通し番号とポイントが記され、一定のトロフィー費用を支払わなければならない。これは、角自体の価格ではなく、撃った行為に対して支払われるもので、最高水準のものを仕留めてしまった時は、国宝となり、私物化できないこともある。料金は車一台分に相当することもあるので(撃つ寸前には、必ず専門ガイドに撃っていいかどうかの判断を得るのだが)、トロフィーの金額も確認することをオススメする。

この品質管理のシステムはおもしろくて、集団で試みるブリーダーのような仕組みになっている。シーズン規制は、トロフ

イー基準も配慮し組まれている。猟師たちは、規定頭数内で、「不良品」を撃ち、いい角になる子孫を残すようにしなければならない。この判断には熟練を要す。角は毎年生え変わるごとに、前に突き出て、重心は根本に下がっていくので、頭を垂れる姿勢や角の枝分かれの位置などが判断材料だそうだ。

特異な価値観はさておき、狩の方法は、おおまかに分けて四種類。1. 見張り台で待つ、2. 追いたて役と仕留め役を決めての猟、3. 馬車・馬ゾリの狩り、そして主人の一番好きな4. 音や風向きに気をつけ、一人で静かに森を歩いて動物を探す方法。確かに、忍び足が上手い。

冬によく行われる、多人数で四方から取り囲んで獲物を追いつめる巻狩りなどでは、特有なセレモニーも存在する。鹿、猪、きじ、うさぎ、どんな狩りでも大抵同じで、明け方、始まる合図にホルンが吹かれ、あいさつ、説明がされる。もちろん狩り前日にも会合は開かれ、まるで軍事計画のような配置図、各自の射程距離・方角の範囲地図が渡されている。これらの手順は全て法

律で決まっています、事故が起きた場合は、この辺の条項も調査される。

夕方の終了パーティーでは、広場に、決まったポーズで獲物が並べられ、四つ角には



焚き火。獲物たちは、最後の食事という意味で、緑の枝が口にくわえさせられ、もみの木の枝で額縁されている。片側に狩人(ゲスト)、反対側にガイド猟師が並び、ホルンの演奏で式が始まり、帽子を取り敬礼する。

帽子には、血液のついた葉枝やキジの尾羽が飾られていることもある。葉枝は、ゲストが鹿を仕留めた際、ガイドにより枝先

に獲物の血液がつけられ、それを帽子に差して祝われた印。初めて猟師の仕事を果たした(獲物を仕留めた)狩人が、獲物の上に伏せ、初心忘るべからず、と木枝でお尻を叩かれるパフォーマンスもあるが、ひとつひとつ長い歴史の中で出来上がった儀式で、自然への敬意が払われている。

一方、日常の作法はごくシンプルで、銃を準備し、狩日誌に、名前と時間、(協会領域内の)これから狩に行く区域を記入し、森へ入る。仕留めたら、内臓だけはその場でさばき、頭と足と一緒に森へ返し、獲物に通し番号のタグを付け、冷凍テナへ運ぶ。持ち帰りたくない場合も同じで、一度冷凍テナで計量、登録し、肉を購入してから自家用冷凍庫へ入れることができる。

主人は、日本でも猟を経験したことがあって、日本らしい仲間を味わうことができたいい思い出、と言っている。そして、もし、ここで経験したい方がいらっしゃれば、いつでもお待ちしております、とのこと。

(もりた・ともこ ヴェスプリーム在住)

Kis Gergely

神のご加護を運んでくる乙女たち

12月。一年を通じて最も大きな変化が起こる時期である。摩訶不思議な雰囲気生まれ展開する。クリスマスが近づいて来ているこの時期に合わせ、クリスマスに関する行事を紹介したいと思う。

キリスト教が広く流布しているヨーロッパでは、クリスマスは遠い昔から一年で一番大切な祭りだとされている。イエスの誕生日をお祝いするキリスト教の人たちにとって中心になるのは家族である。イエスと聖母マリア、養父ヨセフの3人からなる家族の象徴に基づいて、クリスマスの時は家族と一緒に過ごすという習慣が出来た。

アドベントは11月30日の「聖アンデレの日」に最も近い日曜日からクリスマスイブまでの約4週間を指す。この言葉は「到来」を意味するラテン語Adventusから来たもので、「キリストの到来」の

ことである。最初のアドベントを待降節第一主日、もしくは降臨節第一主日と呼び、その後第二、第三、第四と主日が続く。アドベントには、蠟燭を4本用意し、第一主日に1本目のろうそくに火をともし、第二、第三、第四と週を重ねる毎に火をともし蠟燭を増やしていくという習慣がある。通常、蠟燭の色は、悔い改めを表す紫だが、第三週のみ白またはピンクの蠟燭を用いる場合が多い。この点においてはイエスの誕生を待つという意味も含まれている。

ハンガリーでは中世時代、ドイツから移住させられたドイツ人(ドイツ語でUngarndeutschen、ハンガリー語でmagyarországi németek 或いはsvábok)による習慣や信仰がキリスト教と交わり、現在でも多様な習慣が生き残っている。私が育ったKislődという村でもシュヴァーブが多く、色々な習慣が今も伝えられている。村では12月24日に特別な飾り付きの衣装を着た5人の女の子が早朝から午前零時のミサ迄に村にあるすべての家を訪ね歩き、そこでドイツ(シュヴァーブ)語で挨拶をしたり、歌を歌ったり、お祈りをしたりする。一人の女の子は揺りかごの中で眠るイエスの人形を持つことで聖母マリアを象徴し、他の4人は天使たちを意味している。そ

のうちの一人は手に持った鈴を振り、その音でイエスの到来を人々に気づかせながら、各家の門前で次のように歌い始める。
 “Ich bin ein Bot vom Himmel, 私は天から来た大使(天使)だ
 Die Wahrheit euch zu bringen. あなた方に正義を与えるために
 Gott hat euch zu Mitternacht, 真夜中に神があなた方に
 Eine große Freud gemacht. 大いなる幸運を作ってくれた
 Damit ihr mir 's erlaubt, 私の使命は
 sollt ihr mir 's auch glauben. あなた方に私のことを信じさせること
 Ich und noch vier Engelein, 私とあとの四人も天使であるゆえ
 Wir wollen kommen zu euch herein.” あなた方のところを訪れたい



門が開かれ、子供たちが家に入り、次のように告げる。
 “ Um euch das Kind zu zeigen und euch erweisen ,
 幼子イエスを証明すべくあなた方に見せ、
 ihr Engelein eilet geschwind und euere Lichte anzünd !
 彼の天使たちはあなた方に光を授けに急ぐ
 Damit mit uns ein jeder Christ これで全てのキリスト教徒は彼の栄光を
 kann sehen was geschehen ist.” 目の当たりにすることが出来る。

二人の天使は蝋燭に火をつけ、次の祈りをする。
 „Jetzt sind wir schon gekommen an. 我々は既に辿り着いた。
 Jetzt zünden wir unsere Lichte an. 我々の光を授けるために。
 Gelobet sein Herr Jesu Christ, イエス・キリストがほめたたえられ
 der vom Himmel gekommen ist 彼は天から来たる。
 und der im Stall geboren ist, 厩で生まれた。
 Alle -, alle-, alleluja! アレ、アレ、アレルヤ。
 Um euch das Kind zu zeigen und euch erweisen,
 幼子イエスをあなた方に
 Maria mein, komm du herein,bring uns das liebe Jesulein! “
 マリア、幼子イエスを連れ来たれ
 Oh, Christkind mein, komm auch herein wieg uns das liebe
 Jesulein!” クリスキンドも入り幼子イエスをあやせよ。

聖母マリアは家に入り、そこで揺り籠に眠っている幼子イエスをあやしている。そしてイエスの人形を机の上に置く。
 „Freut euch ihr liebe Engelein, 優しい天使たち、私はとても嬉しい。
 euch bring' ich mein zartes Jesulein 私の弱きイエスを連れ来た
 Drum lobet und preiset ja jeder Christ,

全てのキリスト教徒は主、キリストの誕生
 weil Christus, der Herr geboren ist. をほめたたえ賞讃する。
 So komm herein, oh Christkindl mein,
 故に、入れよ。私のクリスキンド。
 vom Gott soll dir 's erlaubt sein.“
 神はあなた方にその使命を与えた。

そして天使たちが次の歌を歌い始める。
 Schau, ob die Kinder alle fleißig beten und gehorsam sein !
 見よ、子供たち皆が懸命に祈り、素直なことを
 Wenn sie alle fleißig beten und gehorsam sein,
 もし皆が一生懸命祈り、素直でいたら、
 werden wir ihnen ein schönes G'schenknis bringen.
 素敵なおもてなしを持って来よう。
 wenn sie aber nicht alle fleißig beten ung gehorsam sien,
 しかし皆が一生懸命祈らず素直でないなら
 werden wir ihnen eine große Rute bringen !”
 我々は長い小枝を持って来よう。

最後の一人(クリスキンド)は綺麗な飾り付の一本の小枝を手にし、訪問を受けた家人の肩を優しく叩き、邪悪や悪魔を祓うために歌う。
 Das Jesukind soll gesegnet sein, ganz nacket und bloß. 罪のない無垢なイエスは祝福された
 In dem Modökodös ihrem Schoß. マリアのひざの上で
 Es geht ein Bot' in der Still', 静寂の中、ひとりの大使が訪れる
 als ihm ein Traum überfiel. 夢を叶えるために。
 Er hört die Engelein singen, 天使たちの歌を聴いて、
 sie führen ihn nach Betlehem, ベツレヘムへ導かれた
 nach Betlehem wohl in den Stall, ベツレヘムの厩で元気に
 wo das Jesukind geboren war. 神の子として生まれた

天使たちは子供に贈り物を渡し、家を立ち去る時には家人に“メリークリスマス”と願い、家人は彼らに” Vergelt's Gott”(神のご加護をという挨拶)でお別れする。私の住む村ではこの行事に参加する子供たちは全員女の子であった。最初に紹介の歌を歌う女の子は小さな人形を持ち先導者を表している。昔は皆、自分で作った白衣を身につけ飾っていた。リボンや珠を付け、冠も被るが、主に使われる色は赤、黄、青の三色である。現在ではもう自分で作ることはなく、翌年この行事の担当になる人に受け渡していくことになっている。12月22日から24日まで村を回るが、神父の家から出発し、聖夜のミサで終わる。教会の祭壇に、この3日間で貰ったお金の入った箱を置き、一番前のベンチに座る。ベツレヘムの芝居、あるいはアダムとエヴァのエデンの園の芝居をする習慣が生き残っている村もある。

こういう習慣が今なお受け継がれていることは本当に嬉しいことであるし、今後も続いて行って欲しいものである。非常に温かい雰囲気を持っている大切な行事だと言える。日本ではこのことを経験できないため、すこし懐かしくて、寂しい。(キシユ・ゲルゲイ)

Oláh Nikoletta

新撰組巡り

2011年の9月から2012年の8月まで城西国際大学に留学しました。春休みにハンガリー人の友達と一緒に、京都に3泊、奈良に1泊しました。「青春18」切符を買って、ホステルの予約をして、朝5時発の電車で東金駅から旅立ちました。東金から京都まで各駅停車で10回乗り換えをして10時間ぐらいかかり、少し疲れましたが、東海道本線を走る電車から見た景色はとても綺麗でした。天気がよかったため、富士山も見えました。富士山はすごく綺麗で、息が止まりそうでした。関ヶ原に停車したので、写真を撮りたくさんとして、戦場はどこだったのだろうと思いました。

宿泊した京都のホステルは祇園にありました。日本の歴史が好きなので、京の都の有名な観光スポットだけではなく、少し特別な旅をしようと思い、明治維新と新撰組に関係があるところを探し、一日中新撰組巡りをしました。新撰組というのは、ご存知のように、江戸多摩地方の剣客たちを中心として、京都守護職の会津藩の元で京都の治安を守るために剣を振るった剣客集団です。朱に誠一文字の旗を持って、浅黄色にだんだら模様羽織を着た男達が壬生寺に屯所を構えたため、「壬生狼」とも呼ばれました。

最初のスポットは油小路でした。御陵衛士を設立した元新撰組伊東甲子太郎はここで新撰組の一員に暗殺されたといわれています。御陵衛士は幕府、そして新撰組の敵であった薩摩藩と協力しようとしていたといわれています。新撰組局長の近藤勇は新撰組三番隊長齋藤一からこの情報を手に入れたと言われています。

次に西本願寺を訪ねました。このお寺は新撰組の第二屯所でした。第一屯所は壬生寺だったのですが、新撰組の組員の数が増えてきたため使えなくなり、西本願寺に移動しました。ちなみに、西本願寺の唐門は日本国宝に指定されています。まだ3月でしたが、ここではもう桜が綺麗に咲いていました。日本に来てから、咲いている桜を見るのは初めてでした。

西本願寺から出て、20分ほど歩くと島原の大門の前に出ました。ここで写真を撮ろうとしていた時、門の右側にある小さな店の前に並んでいるおばあさんたちの姿が見えました。和菓子屋でした。京都の和菓子は日本で一番美味しいと聞いていたので、私たちも食べてみたくなり、団子といちご大福を買って、食べながら島原を散歩しました。ここで見たかったのは角屋という御茶屋でした。この建物はとても珍しいもので、1641年に建てられた元の形で残っています。新撰組の組員もよく、角屋に遊びにいったといわれています。今は、美術館です。残念ながら、美術館の入館には予約が必要で、私たちは角屋の中を見ることができませんでした。そして、島原での散歩を続けました。今の島原はとても静かで、住み

やすそうな所だと思いました。

次のスポットは壬生寺でした。地図を持っていたのに道に迷ってしまい、1時間くらい歩いて探しましたが、なかなか見つけられませんでした。しかし、神様のおかげか、新撰組商品を販売している小さい店に入ることができました。この店の優しい店員さんからもっと詳しい地図をもらって、少し新撰組や新撰組の大河ドラマについて話しました。その上、いい買い物もできました。新撰組副長土方歳三のクリアファイルを手に入れました。新しい地図をもらったのに、また道に迷い、ようやく壬生寺の裏門にたどり着きました。壬生寺には私たち以外の外国人はいなく、しかも女性もいなくて、他の人々は私達をじろじろ見ていたので、初めは少し不安でした。

しかし、この不安感は壬生寺の庭を歩いているうちにすぐ消えました。新撰組の展覧会を見てから新撰組パークに向かいました。ここで新撰組について書かれた歌を聴いて、近藤勇の像と写真を撮りました。日本の各地方の子供たちが描いた絵の展覧会も見て、新撰組がこんなに人気があるのは本当にいいことではないかと思いました。大河ドラマやアニメなどをきっかけに子どもが日本の歴史に興味を持つようになることは素晴らしいことだと思います。

新撰組めぐりの終点は、新撰組が大きく名を挙げた場所、池田屋でした。池田屋事件というのは長州藩・土佐藩などの尊皇攘夷派

志士を新撰組が襲撃した事件です。新撰組に逮捕され、土方歳三に拷問された維新志士・古高俊太郎から、祇園祭りの風が強い日に京都御所に火を放ち、その混乱に乗じて天皇を誘拐して長州藩に連れ去ろうという計画があることが分かりました。新撰組はこの企てを阻止しようとして、池田屋で秘密会議を開いていた尊皇攘夷派志士を暗殺したのです。

当時の池田屋の建物は現在残っておらず、現在は新しい建物に建て替えられています。十数年前まで、池田屋の跡地にはパチンコ屋がありましたが、2009年に新撰組と幕末維新をテーマとしてリフォームされ、はなの舞・池田屋という居酒屋になりました。居酒屋のチラシを見て、本当に驚きました。飲み物や定食に新撰組の組長の名前が付けられていたのです。例えば、沖田定食や長倉カクテルも売ってました。これはちょっと不思議で、新撰組の剣客たちの名前を定食やカクテルにつけるのは尊敬の気持ちがあるようにはあまり思えなかったのですが、私たちは入りませんでした。これは多分、ハンガリー人的な感覚のせいでしょう。ハンガリーでは尊敬されている歴史上の人物は名前も尊敬され、定食やカクテルに名前を付けることは有り得ないと思います。

池田屋で新撰組巡りの一日は終わりました。朝から晩まで歩けばなしだったので、本当に疲れましたが、とても幸せな気分でした。有名な観光スポットだけでなく、私達好みのプランで特別な旅をできたのは楽しかったです。旅だけではなく、学ぶことの多い旅行になりました。(オラー・ニコレッタ)

腫瘍治療における温熱療法の意義

盛田 常夫

もう30年以上も痛風症と高血圧に付き合っている。最近では痛風の炎症が頻発するようになった。その話をする度に、いろいろな人からあれは良いこれが良いと民間療法が勧められる。医者に行けば行くで、尿酸値を高める可能性のある食品リストが渡される。リストを見ると、ほとんどの食品が引っ掛かっている。私の場合、痛風症も高血圧も遺伝だから、尿酸値が低くても炎症は出る。タバコは吸わないし、お酒もほどほどで、肉や内臓物を食べることはないし、そもそも食へのこだわりも失せ欠けている。こういう生活を続けているのに、あれを食べてはいけないこれを食べてはいけないという注意書きを渡されると、「私の人生は痛風症を克服するためにあるのではない」と言い返したくなる。だから、膝に水が溜まってどうしようもない時以外は、医者の世話にはならない。

そもそも、尿酸値を下げる薬剤や降圧剤を半永久的に摂取することで別の機能障害が発生することはないのか、複数の薬剤が相互にどのように作用し人体機能に影響を与えるのかについて、医者はもちろん製薬会社も知らないし責任をとらない。摂取する薬の数が増えれば、薬剤相互の複雑な相乗作用について、誰も責任をもてない。そういうことに頓着せず、医者とは各種の薬剤を処方し、死ぬまで飲み続けることしか方法がありませんなどと無責任に患者に伝える。多くの高齢者が食事よりも、各種薬剤を次から次に摂取しているが、それで病が良くなるとはとても思えない。ここには近代の西洋医学が抱える根本的な欠陥があるように思う。

正のフィードバックと負のフィードバック

生体は自己制御能力をもつ一つのシステムであり、障害や疾病を治癒し正常な自己制御システムを再興するメカニズムをもっている。この自己制御システムのおかげで、生体の恒常性(ホメオスタシス、homeostasis)が維持される。その基本的な原理はフィードバック機構による制御機能である。たとえば、外温が高くなると、

生体は発汗作用によって皮膚を冷却し、熱が体内に入らないようにする。逆に、外温が低くなると、血管を収縮させることによって、血管をとおして熱が体外に逃げるのを防ぐ。こうやって、生体は一定の体温を保っている。サイバネティックスの用語を使えば、この温度調節機構は「負のフィードバック」が作用しているという。一定の温度許容値の幅のなかで、サーモスタットが機能していると考えればよい。この種のメカニズムが酵素などの化学反応にも作用している。

もし高温の環境下に長時間晒されると、負のフィードバックが作用しなくなる。そうすると、生体の生存許容温度限界を超えて、体温が上昇する。これを放置すると、やがて生体は死を迎える。制御機構が働かず、システムが拡散する状態だと考えればよい。これが「正のフィードバック」である。低温の環境下の場合も同じように考えることができる。長時間低温にさらされると、通常温度で作用する生体の自己制御機能が効かなくなり体温を正常温度に戻すことができず、体温は下がり続ける。これも「正のフィードバック」で、生体は死へと向かう。

ホメオスタシスを維持する負のフィードバック機能が作用しなくなり、正のフィードバックが作用し始めると、生体は不可逆的な破滅過程に入る。それを避けるために、薬剤を使って阻止するか、ホメオスタシスを再生するような作用を生体に加える。医療の基本はホメオスタシスの正常作用を機能させることなのである。

西洋医学と東洋医学

負のフィードバック機能が効かなくなると、いろいろな疾病が顕在化する。悪性腫瘍も生体が本来保持している悪性細胞を淘汰する機能が失われ、正のフィードバックで悪性細胞が増殖する現象として理解できる。負のフィードバック機能を再生するために、薬剤が投与されたり、外科手術が施されるのだが、現代の西洋医学は人体のホメオスタシスの再生を治療の目的にしている。西洋医学の基本は対症療法(局所治療)が基本である。したがって、悪性腫

瘍が見つければ、とにかくそれを叩くことが主要目標になる。

局所的な治療では、生体の全体的状態の評価やホメオスタシスの回復という視点が失われる。だから、抗がん剤治療のように、「産湯とともに赤子を流す」ごとく、腫瘍細胞を殺すために健康細胞まで一緒に殺してしまう。抗がん剤が狙うのは特定部位の腫瘍であって、それに苦しんでいる一人の人間としての生体ではない。生体がどのように苦しみうとも、特定部位の異常を叩くことだけが治療目的になっている。それぞれ異なるホメオスタシスの状態にある個人が治療対象になるのではなく、特定部位の異常が医者の治療対象になる。ここから本末転倒の医療行為が一般化する。一時的に腫瘍が縮小しても、生体は生きる力を失い、治療を回避した場合に獲得できた時間を失い、死を早めることになるかもしれない。生命を救うはずの医学が、逆に命を縮めているとすれば、これほど皮肉なことはない。

これにたいして、東洋医学は生体の自然な自己制御能力の維持や回復を第一義的目標にしている。逆に言えば、ホメオスタシスの維持や再生を目的とするのが、東洋医学だと言えよう。いわゆる各種民間療法のほとんども、意識すると否にかかわらず、このような方向性をもっている。体を冷やさないようにするというのは、日常知として古くから教えられている知恵であるが、それは適正な体温を保つことが、健康を維持する基本だと認識されているからである。それには確としたとした科学的理由がある。生体の各種酵素反応や免疫反応は一定の温度領域でもっとも効果的に機能するからである。

このように昔から言い伝えられ、慣習として守られている健康法にはそれなりの合理性があるのだが、多くの民間療法はその科学的裏付けを得ないままに伝承されている。そこにいかさま療法が横行する余地がある。市井の人の科学的知識の水準は高くなく、他方で現代医学がいまだ多くの疾病の治癒に無力であることから、藁をもすがる思いの患者は荒唐無稽ないかさま治療の餌食になる。

民間療法は現代医学が解決できない部分を補完していると言えるが、可能な限りその科学的根拠を明らかにすると姿勢が大切で、それなしではたんなる伝承的知恵に留まる。

Evidence-Based Medicine (EBM、根拠にもとづく医療)

現代医学は「根拠にもとづく医療」を原則としている。少なくとも薬剤や医療機器の科学的根拠と実証データを示して、それぞれの認可を受けることが制度化された。これが提唱されたのはそう昔のことではないが、各種多様な民間療法と医学にもとづく医療行為を明確に区別するという意味合いがある。

他方、EBMが提唱されてから、薬剤認可のプロセスが複雑長期になり、簡単に認可を得ることができなくなった。新薬の開発と認可には10億円単位の費用と10年程度の時間が必要になるから、大手の製薬会社でなければ参入できない市場になってしまった。しかも、いったん認可された薬剤の価格は、すべての先行投資費用を回収するように設定されるので、製造原価の何百倍もの価格が付けられことになる。こうなると、製薬会社と医者の世界は非常に強い経済利害によって結びつけられることになる。

ソバトヘイにあるマルクシヨフスキー病院では腫瘍の温熱治療(医療保険適用)が行われており、ハンガリーのOncotherm社が開発した機器が使用されている。近隣諸国からも患者が治療を受けに来る。その病院に日本人の患者を紹介した時のことだ。

ハイパーサーミア治療を受ける前に腫瘍内科医師の許可書が必要なのだが、ちょうど担当医師が不在で、別の医師から1枚の書類に署名を得なければなかった。その医師は温熱治療に関心がなく、われわれが椅子に座った途端に、新しい抗がん剤治療の臨床試験への参加を求めた。患者から病状を聞くこともなく、日本から持参した画像に目を通すこともなく、「貴方の腫瘍部位の治療に適した新しい抗がん剤治療の臨床試験が始まり、世界各国でこれに参加する患者を募っている。もう枠が少なく、早く参加した方がよい。貴方の身長と体重をすぐにも製薬会社に

FAX するから」と、こちら話を聞くことなく、FAXでデータを送った。「そういうつもりで来たのではなく、温熱治療を受けにきたのです」というと、「それなら、付き添いの担当者が署名すればよい。私の診療を待っている患者がたくさんドアの前にいる。私は忙しいのだ」とわれわれの退席を求めた。日本のお土産を渡し、署名をもらってその場を離れたが、この医師の姿勢に驚いた。この医師には患者の治療よりも、抗がん剤の臨床試験の対象者集めが重要なようだ。臨床試験に参加する患者を一人でも獲得すれば、製薬会社からの補助金が見込めるからだ。こういう本末転倒した現象は医療社会で一般的に観察できる。それもこれも巨額な投資なしに新薬が認可されないという現代医療世界の問題にその根源がある。

熱と腫瘍治療

熱で腫瘍を治療する手法は医学史上、もっとも古い治療法である。医学の父と呼ばれるヒポクラテスは、熱で治療できない疾病は治癒不可能だと考えていた。それほど熱(火)にたいする信仰は高かった。これはギリシア哲学の影響というより、実際に熱で腫瘍細胞を殺すことが出来るという経験から得られた知恵である。

現代でも、腫瘍細胞が熱に弱いという認識は常識になっており、さまざまな方法で腫瘍治療に熱が利用されている。もっとも一般的な手法はアブレーション(高温焼灼法)で腫瘍を切除するのに利用されるが、不整脈の原因となっている心臓の部位を焼く技術としても使われている。抗がん剤を温수에混ぜて腹腔内に還流させる手法(温水還流法)も、それである。驚くことに、腫瘍の外科手術の後に、温水を撒くというきわめてプリミティヴな手法も、医者の間ではその有効性が信じられている。

これらの熱の認識はギリシア時代の素朴な認識をそれほど超えるものではない。ヒポクラテスの時代から数千年の間を経ても、何百種類も存在する温熱治療の多くはいまだ素朴な伝承医療のレベルに留まっている。ほんの少し前は、がん患者を42℃の温水につける手法が流行ったことがある。各種の光線を使った温熱療法やサ

ウナ式の温熱療法、岩盤浴など、この種の民間療法は数え切れない。しかし、これらのどれも医療的行為とは見なされていない。科学的根拠が明確でないからである。何が問題なのだろうか。

素朴な温熱治療が共通して抱える問題点は以下の二点である。

一つは、体全体を温めたのでは、特定部位の腫瘍への治療効果がないことだ。これは標準的腫瘍治療(外科手術、抗がん剤治療、放射線治療)が抱える問題と同じで、腫瘍の局所的加熱の選択性がなければ、温熱治療の効果もないばかりか、逆に腫瘍への血流を増やし、悪性細胞の拡散を招く恐れがある。

二つは、体内の深部にある腫瘍を加熱することの技術的困難である。ほとんどの加熱技術は皮膚の表面を温めることができるだけで、体内に熱を送り込むことはできない。

サウナや各種光線療法がどのような快感を与えようとも、熱エネルギーを体内に送り込むことはできない。生体の皮膚は何重ものシールド構造で外部からの熱を遮断する機能を備えているからである。熱による快感は熱ショックタンパク(HSP: heat shock protein)が増える効果によるもので、これはそれなりの健康維持効果はあるが、腫瘍治療には役に立たない。

もし90℃を超えるサウナに入ると体内が40℃以上の高温になれば、生体は死の危機を迎える。サウナで人が死なないのは、どれほど空気が熱かろうとも、皮膚の発汗(冷却)作用によって、熱が体内に入ることを遮断するからである。

逆に言えば、体の深部を、しかも腫瘍を選択的に加熱するためには、高度な生物物理学的知識と工学的技術が必要である。このことをきちんと理解できる医師が少ないことが、正しい温熱治療の普及を妨げている。ハンガリー人物理学者が開発したオンコサーミア(腫瘍温熱治療)機器は、まさにこの温熱治療の最大の弱点を克服したものである。しかも、副作用がなく、生体のホメオスタシスの再生を促進する点で、西洋医学と東洋医学を統合しているとも言える。この技術のいつその開発に期待したい。(もりた・つねお 「ドナウの四季」編集長)

闘わない闘病記 (1)

佐藤 経明

まえがき

私(1925年4月23日生)は去る2011年11月初めに胃ガンが発見された。かなり大きかったので直ちに手術出来ず、抗がん剤(最初はTSワンの服用、2012年3月下旬からはカンプトテポトシン/通称・イリノテカン/の点滴投与)で癌を小さくしてから手術するという正攻法の戦略方針で経過していた。2012年5月末、癌は小さくはならなかったものの、腫瘍マーカーその他の検査パラメーターが好転したので、主治医はためらいながら「切るとしたら今しかないかも」と言われた。

むしろ私が「お願いします」と積極的に推進して6月13日、近くの虎の門病院梶ヶ谷分院に入院、15日胃の全摘出手術、その後、2か月の入院生活を経て敗戦記念日の前日、8月14日に退院、今日まで予後生活を送っている。

主治医は幸い、虎の門病院上部消化器外科・U医長という、このジャンルでは第一線級の専門家に引き受けて頂くという幸運に恵まれた。30分以上も説明して下さるといふinformed consent を絵にかいたような扱いで、手術自体は大成功だった。控室にいて摘出した胃を見せてもらった家内と娘の話によると、「胃壁に大きなアワビが張り付いた」ような状態で、そのまま経過したら二三月で食物摂取不能に陥ったことは殆ど間違いないから、おそらく手術可能な最後のチャンスであった。しかし、主治医も言われたように「取れるものはすべて取ったが癌細胞は残っている」から、「退院イコール全快」ではない。

手術日の早朝8時半、手術室総看護師長に腕を取られながら廊下を手術室に歩いて行った時、私は耳の奥で「死刑台への行進」(ベルリオーズ「幻想交響楽」)を聴いているような錯覚があった。この世に「生還」したとはいうものの、残りの時間がかなり限られていることは認めないわけにはいかないから「不安な成功例」と言うべきかもしれない。

私の場合は比較的恵まれたケースと言

えそうだが、すべてが順調であったわけでもない。私なりに様々な教訓を学んだ。それをありのままに記してご参考に供したいと思う。

経緯

1. 私がみぞおちのあたりに何となく違和感を覚えるようになったのは、2011年早春のことではなかったか。だが私は「中年から得た健康」を過信していたため、すぐ受診しなかった。私は旧制中学3年時、結核で瀬戸内のサナトリウムで2年間を過ごした。サナトリウムというところはインテリの吹きだまりで、私は15歳の最年少患者だったから、「先生」には事欠かなかった。代々医家の家に生まれたため仏文志望を諦めたと言う阪大医学部出の若いお医者さん、三宅正隆先生は私の顔を見ると「キミは仏文に行ったらどうですか」と言うのが口癖だったし、東京音楽学校(現・芸大)出の三十代の夫人、武野高子さんは病が重くて殆ど寝たきりだったが、私にレコードをかけさせて曲想の伝え方などを教えてくれた。今でも面影が浮かぶ「私の大学」の先生たち、戦後まで生き残ったのは三宅先生一人しかいない。

この間のことは昔、私記「一病息災・プラス・アルファ」に書いている。「プラス・アルファ」というのは、「私の大学」で勉強したことだけでなく、ドイツ語を独学したこともあった。そのため、2年遅れで入った旧制六高では、ドイツ語の授業をさぼってフランス語を勉強していた。のちに私が東西ヨーロッパを歩くのに余り不自由を感じなかったのは、この時のお蔭でもある。サナトリウムでは冬の夜にも窓を少し開けて寝ていたから、空気の清浄さに敏感になり、完全ノンスモーカーで通したことも、この時の余恵である。

それでも大学を出るまでは疲れやすかったが、漸次、元気になってきたところに「転機」が来た。40代の半ば、ろくなコピー機械もなかった頃とて、カーボン紙を何枚も重ねてタイプライターを強く打っていたら、右手に激痛が走って腱鞘炎になった。知り合いの整形外科に通ってお決まりのマッサージ、電気ショックに(多分、いまでは使わな

いのだろうが)飲むと眠くなる筋肉緩和剤といった治療を受けたが、一向に良くならない。そんなある時、院長留守番に来た東大病院の若い医師が「これは整形外科では治りません。運動をして自分で直しなさい」と助言してくれた。頂門の一針、「なるほど」とその頃住んでいた石神井公園の池の周りをジョギングし始めたら、全身状態の好転に合わせて薄紙を剥ぐように腱鞘炎も直ってきた。それに力を得て、大学の同僚に誘われるまま、北・南アルプスの山登りも始めた。最初に登ったのが3000メートル近い鹿島槍ヶ岳だったから、殆ど無謀に近かったが、梅雨明け一番の7月18日、山頂から雲ひとつない360度の全景を見渡した時の歓喜は今でも忘れることが出来ない。

1972年1月、現在の住所(田園都市線・宮崎台)に引っ越してからジョギングに山登りを併用していたが、25年前、駅前に大きなフィットネスクラブが出来てからは、水泳と水中ウォーキングを中心にしてきた。子供の時に習った古式泳法変形の横泳ぎ300メートル、水中ウォーキング500メートルくらいが定番だった。同年輩の友人たちよりもはるかに元気になって来たので、この「中年から獲得した健康」を過信していたのである。みぞおちの違和感など、泳げば消えると思っていたし、また事実、消えることも多かったのである。

これまでの経緯の最初の教訓は、次のようになるだろうか。

教訓1 健康を過信するな。少しでも持続的な違和感があったら、信頼できる医師に診てもらおう。しかし、この「信頼できる医師」と言うのが実はなかなか難しいのだ。

2. 私は虎の門病院の名手の手で手術を受けたのだが、それに至る経過には大きな「波乱」があった。一旦、ある私立医大病院に入院したのだが、入院当日の夕方、強引に「退院」という、余り例のない経過を経たのである。この間の経緯には「他山の石」として頂ける教訓なしとしないから、次号「その2」で詳しく述べることにしたい。

(さとう・つねあき 横浜市立大学名誉教授)

日本の熱気球免許、アメリカで通用せず
～第20回熱気球世界選手権 アメリカ～

加藤 詩乃

2010年ハンガリー・デブレツェンで開催された熱気球世界選手権から2年、昨年8月に第20回熱気球世界選手権がアメリカ・ミシガン州バトルクリークで開催されました。ハンガリー大会では日本代表選手は7名でしたが、ハンガリー大会での不振から1枠減り、アメリカへは6選手のエントリーとなりました。



一斉離陸 ぎゅっり気球が並び離陸する

ハンガリー大会の様子は「ドナウの四季」でもご報告させて頂きましたが、熱気球競技は機材の SHIPPING や現地での車両、滞在など競技以外の手配が膨大にあります。ハンガリー大会では、この点でも苦労しました。アメリカではこの点は楽勝と思っていましたが・・・とんでもない事態が待ち構えていました。

それは、気球の操縦免許問題。

日本では、気球は航空機として認められておらず、国の定める免許もありません。日本気球連盟という団体が技能試験・適正などを審査し「熱気球操縦技能証明」を発行しています。一方、海外では気球が航空機である所も多く、アメリカでは明確に航空機の一つです。よって、アメリカでは気球の操縦には国の定める免許が必要で、国から認められた機体のみが飛行可能です。

厳しく考えると、アメリカでは気球とはいえ上空から爆弾投下するという危険性も考慮した上で国が管理しているのでしょう。日本は平和なのだとも言えます。

日本の気球連盟が発行した免許は、あくまで民間団体の発行した免許なので、アメ

リカでは通用しません。アメリカの免許への書き換えもできません。この問題は、昔から判っていたはずなのですが、よく知らない人は「日本の免許がアメリカで通用しない訳がない」という思い込みと、知っている人もアメリカの気球大会で日本人がフライトする場合、アメリカのパイロットを同乗させたり・・・またはその大会主催者の判断で許可したり・・・といった、うやむやなまま昨夏に至っていました。

しかし、今回は世界選手権。明確に、この問題が明るみになりました。それも、8月開催だということに、アメリカ側からの通達が出来たのは、7月中旬頃。数週間を切った期間にできる事は、わずかでした。大使館や、国土交通省の方などにもご尽力いただきましたが、法改定はその短期間では不可能で、かつ特別処置もできませんでした。

結局、日本人パイロットは全員、アメリカ渡航後、アメリカの熱気球操縦士のスチューデントパイロット(訓練生)となり、ソロフライト(一人でフライト)の許可を受け、スチューデントパイロットして世界選手権にエントリーするという異例の事態となりました。もちろん、前代未聞です。

気球機体は、日本から SHIPPING した5機はそのままでは使えず、急遽、アメリカの機体に登録し直しました。1機はアメリカから借りました。スチューデントパイロットへの訓練、手続きも、機体のアメリカ登録も、すべてアメリカの皆さんの献身的なサポートのおかげでした。

日本で気球がスタートしたのはおよそ

40年前です。1960年代後半、安保闘争など当時の社会運動とは異なる思いを抱い



ミシガン州 バトルクリーク 湖と森の広がる美しい場所

た学生たちが中心になり、外国の小説や映画で知った熱気球を手作りし、飛ばしたのがスタートでした。その当時、活躍された方々が、今もまだ日本の熱気球界に健在で、みなさんの思いは、気球は自由の象徴で、法律に縛られる事なく、自分たちで秩序を保っていきたいというものです。

その点は、私もとても共感するものがあります。

しかし気球とはいえ、国際大会へ参加する選手も多くなり、また一般的な外交状況からみても、日本国内のみで通用するルールで、貫き通すのはなかなか難しい物があると感じています。

国際的にも受け入れられ、かつ、日本のこれまでの歩みをも尊重した免許、今後どうなるでしょうか。

さて、アメリカ大会では、準備段階で極めて困難な状況になりましたが、日本選手がはじめてトップ3に食い入る事ができました。

熱気球世界選手権、次回は2014年ブラジルです。

(かとう・しの)



FAA(アメリカ連邦航空局)でスチューデントパイロットの手続きを受け書類を受け取った後、アメリカの友人の献身的なサポートのおかげ



ぴかぴかの一年生と新米バザー係 ジョーリ 幸子

「みんな、すすすぎるよ。ボク絶対ムリ。補習校には入らない方がいいよ」。初めて授業を見学した時の長男の反応はこうだった。当時の1年生の3学期の授業を見て怖じ気づいてしまったようだ。何しろ「漢字で算数」をやっていたのだから、並々ならぬ衝撃だったようだ。「田」+「力」=「男」。息子には暗号にしか見えないのだが、補習校の生徒たちは、次々と先生の出す問題に手を挙げて答えている。先生に当ててもらいたくて、椅子の上でぴょんぴょんお尻を浮かせたり、今にも椅子から転げ落ちそうになっている子もいる。あれほど積極的に日本語の授業に参加するなんて、慎重な性格の息子には異次元の世界だったようだ。

気の進まない息子をどうにか説得して、4月の入学式を迎えた。飛び交う日本語の半分も息子は理解していたかどうか。写真撮影の時にむりやり作った笑顔も緊張でこぼれていた。息子が新しい世界に飛び込んだ



日、親である私も「補習校の保護者」として仲間に入れて頂くこととなった。初めての保護者会では、保護者の意識の高さ、真剣さ、そして快活さが印象的だった。ついていけるのかどうかという不安、早く仲間になりたいという期待が入り交じり、息子同様私も緊張した笑顔で自己紹介したことを覚えている。

2学期になり、息子が急成長を見せ始めた。9月にハンガリーの現地校に入学し、環境も変わった。勉強することにも慣れ、日本語の語彙が増えた。暗号だと思っていた「田」+「力」=「男」が理解できるようになった。少し安心してた頃、保護者会で予想外の出来事が起った。

「ジョーリさん、バザー係をお願いできませんか」。バザー係は毎年3名なのだが、1学期の時点でまだ2名しか決まっていなかった。突然私が3人目のバザー係に選ばれたのだ。バザー係といえば、どんなことをイメージされるだろうか。準備に忙殺される印象が強いように思われる。一瞬迷ったが、頼もしそうな先輩保護者を見て、なんとかなるような気がした。大変だろうけど、楽しそう。指名して頂いたのは運営委員会からの愛情だと受け止めた。

今年の補習校バザーは5回目だそう。毎年少しずつ形を変えながら、どんどん規模が大きくなっている。先輩方のこれまで培われた経験やノウハウのおかげで、戸惑うことなく係の仕事を進めることができた。しかしバザー係3人だけでは決して準備できるよ

うなものではない。数年前から保護者全員に協力を呼びかけるようにしている。子供たちが授業を受けている間、みんなで手分けして提供品の分類や値付けをした。そしてこの時間がまた楽しかった。てきぱきと作業をしながら、おしゃべりにも余念がない。明るい笑い声が響き、「しまった、授業中だった!」、なんてこともしばしばあった。それぞれができる範囲で参加し、開放的な協力体制が心地よいと感じた。

バザー当日は子供たちも参加して、楽しい時間を過ごすことができた。2ヶ月以上かけてバザーの準備をしながら、特に印象的だったのは補習校のチームワークの良さだ。正直に言うと、どこかで意見がぶつかったり、ちょっとお互いにイライラする可能性もあるだろうと心構えをしていた。ところが最初から最後まで、本当にみんなが心から楽しんで、和やかな雰囲気のまま片付けまで済んだのだ。最後にバザー係のリーダーから挨拶があった後、体は疲れているにも関わらずみんなが口々に「このまま打ち上げに突入したいねー!」と言ったほど、連帯感と充実感に溢れていた。

補習校バザーは単に売り買いをするだけの場ではなかった。準備などを通して保護者同士の交流を深めるきっかけにもなった。補習校で勉強している子供たちを多くの人に見ていただくこともできた。生徒の多くが自分のブースを作って、使わなくなったおもちゃなどを自分たちで売ること挑戦してくれた。二カ国語で接客して褒めてもらった子もいたようだ。当日は笑顔のお客さんもたくさん見ることができた。バザーで会うのが恒例になっているのであろう来場者同士が、おしゃべりに花を咲かせている様子も見ることができた。子供たちが喜ぶようにとサプライズを用意してくださった企業もあった。新米バザー係の私には想像もできなかったような副産物がたくさんあったのだ。

補習校に通うことにどれだけの意味があるのか悩むこともある。親にも子供にも負担が大きいことは否めない。しかし、バザーも含め、補習校での「学校生活」は私たち親子にとって貴重な体験であると実感している。普段ハンガリー社会にどっぷり浸かっている私たちにとって、補習校は日本人であることを再認識する場でもある。息子は日本語で意思疎通できるようになるにつれ、自分は日本人でもあるということを実感しているように見られる。

特殊な環境に育っている補習校の子供たち。いつか「特殊」であるという賜物を、自分自身にそして社会に生かすことができますように。



Petőの方法を取り入れた特別支援学校での研修を終えて

菊地 智裕

昨年の夏、日本からハンガリーへ治療のために来た子どもが、こちらの特別支援教育(障害を持った子どもたちの自立や社会参加を目指す教育)を受けて、とても良くなって帰国したという話を聞いた。職場の仲間から聞いてみると、世界的にも有名な方法がハンガリーにあるらしい。それはConductive Education(以下CE)という教育方法であった。この指導方法は、ハンガリー人Pető Andrásが開発した方法で、子どもの脳性麻痺や大人のパーキンソン病などで、身体が思うように動かない人々に効果があるため、現在でも用いられている教育方法の一つである。そこで、CEを行っている特別支援学校1にて、実際にどのようなことが行われているのかを見てみたいと思い、11区にある学校(Konduktív Általános Iskola és Kollégium)を研修として訪れた。

CEの特徴の一つは、つかむことや歩行訓練のために棒を利用していることだった。この学校の廊下や教室には肋木(ろくぼく)2があった。また廊下や教室にある椅子の背もたれにも小さな肋木がある椅子を利用していた。このイスはPetőイスと呼ばれ、PetőがCEのために開発したものである(写真)。できることが多いほど肋木の本数は少なくなり、一人で活動できる子どもは普通のイスに座っている。肋木は、歩行訓練やつかむことの練習などに必要な様々な用途に利用できる。そのため、本数が多い場合、それを利用することで、活動することが容易になる利点がある。また、椅子に落ちて座ることに気が配られていた。足が地面に着くように、足が床に届かない子どもには、足下に台3を置いていた。踵が少しでも浮くと、研修生や養護者が足を床につけさせていた。このような行動訓練や座ることの指導を通して、自分で自分の体をコントロールすることを学習し、落ち着いた状況を作ること、集中して子どもが授業に取り組める状況を生み出していた。

研修の担当者が話してくれたことで印象的なことが2つあった。①自分でできることは自分でする。自分でできないことは仲間が手伝

う、②保護者とのコミュニケーションを大切にすることであった。この子どもたちは、お互いができることが違う場合が多い。基本は自分のことは自分でする。しかし、できないことに関しては、仲間が手助けしてあげることで、できるようにしている。そのために、行動するときには集団4で行うことを基本としていた。これは、学校を卒業したときの社会の中で行われていることと同じである。このようにしていくことで、自立の意識や人を助ける意識を育成している。また、保護者とのコミュニケーションは、有効なCEを行っていくためには欠かせないことである。子どもたちの障害の程度によっては、保護者が教室の中で子どもを手伝う場合もある。また、この学校には寮があるが、週末には子どもたちは帰宅したり、毎日通学してくる子どもたちもいる。このように子どもが家にいる時に保護者が子どもを指導する方法は、学校と保護者が話をしながら決めていく。そうすることで、学校と家とで同じ指導が可能となる。



日本において、特別支援学校のボランティア活動や、研修を経験してきた。いずれの学校も同じように、特別に整備され、障害を持った子どものための準備が行き届いた学校のように感じてきた。逆に言えば、このような学校で

ないと、障害を持った子どもが一日の活動をするに困難が生じると感じた。しかし、今回の研修校では、これまでとは異なる印象だった。それは、ハンガリーにある障害のない人たちが行く学校の設備とほとんど同じと感じたことだった。確かに肋木などは、普通の学校の廊下にはないだろう。しかし、校内の廊下の広さや教室の設備などのハード面は、本校の隣の現地校や補修校が借りている校舎とほとんど変わらない感じであった。このことから、こちらのどんな学校でも、ちょっとした工夫で誰もが通える学校の良さが出てくる気がした。このような工夫は日本の障害を持たない子どもの学校でも利用できそうに感じた。また、この学校の2つの方針は、日本の学校教育の中でも取り入れられている事である。

世界に先駆けた1945年という早い時期からハンガリーにおいては、CEがなされてきた。このような障害児教育の原点と考えられるものの一つを知ることができ、そこから、これからの日本の教育について教育の原点とも言われる特別支援教育という立場から考える機会があったことを幸運に思う。

終わりに、今回の研修の機会を作って頂いた川口校長、向井マリア氏、情報を提供していただいた坂井副校長、日原美由紀氏、通訳をして頂いた桑名一恵氏に感謝いたします。

注

1. ハンガリーの特別支援学校は、日本と同様に肢体不自由や盲・聾のように分かれている。脳性麻痺などの子どもたちが行くのは肢体不自由の特別支援学校である。ただし、重度の肢体不自由である場合は、学校ではなく、病院のようなところにある教育施設で対応している。
2. 日本の学校の体育館にあるはしごのように木製の棒が並んでいるもの。
3. この台の形状は箱型のものや、足を左右に分けて置けるようになっていたものなど子どもに合わせた形になっていた。
4. 集団で行動するのもCEの方法の1つ。

(きくち・ともひろ 日本人学校)



スポーツ行事・運動サークル情報



ゴルフ部

<12年度、公式行事活動報告>

○ 月例会

<優勝> <2位> <3位>

- ・3月月例会
川口(日本人学校)、 榎平(菱和)、 青島(矢崎総業)
- ・4月月例会
秋山(マジャールスズキ)、 安藤(伊藤忠)、 川口(日本人学校)
- ・5月月例会
成沢(伊藤忠)、 森本(菱和)、 柿崎(マジャールスズキ)
- ・6月月例会
金廣(ユーラシア)、 勝川(菱和)、 阿部(大気社)
- ・7月月例会
栗原(スタンレー電気)、 高橋(AEMSS)、 坂下(ブリジストン)
- ・8月月例会
竹内(マジャールスズキ)、 森本(菱和)、 阿部(大気社)
- ・9月月例会
金子(東洋シート)、 川口(日本人学校)、 安藤(伊藤忠)
- ・10月月例会
柿崎(マジャールスズキ)、 榎平(菱和)、 川口(日本人学校)
- ・11月月例会
坂下(ブリジストン)、 柿崎(マジャールスズキ)、 勝川(菱和)



○ 第16回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(春季大会)

=ゴルフ部後援=

優勝: 坂梨(丸紅)、 準優勝: 畑山(ソニー)、 3位: 柿崎(マジャールスズキ)

○ 4カ国対抗戦

(6月 オーストリアにて開催。HU, AU, CZ, SKチームによる対抗戦)

ハンガリーチーム: 準優勝

○ 第17回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(秋季大会)

=ゴルフ部後援=

優勝: 柿崎(マジャールスズキ)、 準優勝: 辻(日清)、 3位: 坂下(ブリジストン)

○ 第3回年代別対抗戦(11月開催): 優勝 20-30歳代チーム <部員募集>

13年度も3月下旬から活動を予定しています。ベテラン部員が帰国され、現在、部員数が減少気味です。

ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフにご興味のある方は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。(連絡先: ユーラシア・ロジスティクス 藤井 akihiro.fujii@eurasia.hu)

テニス部

テニス部活動報告

日曜テニス部の紹介をさせていただきます。世話役が交代しました。伊勢雅尚が新しい世話役として、日曜テニスのお世話をいたします。

① 現在の部員数

日曜日: 17名 (男性14名、女性3名)

② 活動場所と時間帯

日曜日: Match-point tennis Club 午前9時~11時

<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>

③ 本年度の実施活動

日曜日: 各種親睦会 (随時)

④ 連絡先

日曜日: 伊勢 メールアドレス: m.ise@idakaurope.cz

TEL: +36-30-488-8934

⑤ その他

日曜日: 日曜テニスは家族で参加されている方もお見えで、初心者から上級者まで幅広くテニスをプレイしています。

冬季シーズンスタート!

2012年10月より冬季シーズンがスタートしました。

ご興味のある方はぜひ以下にご連絡下さい。

編集部よりのお知らせ

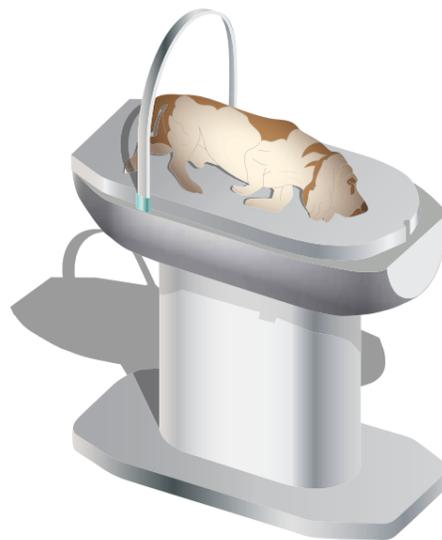


「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、

ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



THERMO-PET

Oncothermia Treatment for Animals



Developed by Oncotherm Ltd. and Tateyama Machine Ltd.



CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネジメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.
Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846
Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu
web: <http://propart.client.jp/>





コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書



ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円